國學院大學学術情報リポジトリ

増幅される「笑い」：太宰治「貧の意地」と井原西鶴「大晦日はあはぬ算用」

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 安西, 晋二, Anzai, Shinji メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000134

増幅される〈笑い〉
——太宰治「貧の意地」と井原西鶴「大晦日はあはぬ算用」——

安西晋二

Ⅰ　差異を読む授業空間

筑摩書房の平成二六年度版教科書『精選現代文B』（平成26・1）に、太宰治「貧の意地」（「文藝世紀」昭和19・9、なお原題は「貧の意地——新釋諸國噺——」）が掲載された。「貧の意地」は、井原西鶴の「大晦日はあはぬ算用」（『西鶴諸国咄』所収、貞享二年刊）を典拠としており、これは、古文の定番教材になっている作品である。

『精選現代文B』の「貧の意地」では、「表現」の項目で「この作品の元になった井原西鶴の「大晦日はあはぬ算用」（『西鶴諸国ばなし』）を読んで、どのように印象が異なるか、話し合ってみよう」と、生徒に対して直接的に問い掛けられている。「大晦日はあはぬ算用」が収載されている、筑摩書房の教科書『古典B　古文編』（平成26・1）にはなかった、改作と典拠とを対照させる読みが、「貧の意地」の採用により、高校の国語教育において示唆されたのである。その結果、二つの作品を現代文と古文とで同時期に扱い、読み比べる授業が展開できるようになった。一般的な授業では、現代文と古文とがなかば断絶した状態で進められがちではあろう。読み比べるという

行為は、相補的あるいは往還的な思考を求める。教科毎に閉じられていた授業空間の開通も可能となった。本来は連続したものであった現代文と古文との経路を生徒に意識させるきっかけとして、「貧の意地」と「大晦日はあはぬ算用」との対照は有効に働くはずである。

両作を読み比べたとき、まず分量の差に気付くだろう。「貧の意地」が収載された太宰治の『新釋諸國噺』（昭和20・1、生活社）の「凡例」にも、「原文は、四百字詰の原稿用紙で二、三枚くらいの小品であるが、私が書くとその十倍の二、三十枚になるのである」とある。「貧の意地」における分量の増加は、とりわけ、登場人物らの造形や、「アフォリズム形式の説明文」[1]と指摘された語り手の言説などに費やされている。語り手の問題は、典拠とは大きく異なる「貧の意地」の特徴であり、対比的な読みを導く観点にもなる。饗庭孝男は、「貧の意地」における「太宰の換骨奪胎」ついて、「ユーモアとアイロニーを含んだ心理描写を作中人物のおのおのに与えることによって、奥行をまし、ふくらみを持っている。それは西鶴の小説の枠をかりただけの近代小説であるといっても過言ではない」[2]と述べた。このような解説を補助線とした、古文の授業との連携は、双方向的に両作の差異を思案する時間の形成となる。近世の文学作品と近代小説との違いを生徒に投げ掛け、両作の差異自体を読む行為は、高校の国語教育における読書の幅をも拡大できよう。

典拠との差異は、どのように書き換えられたのかを知る、重要な手がかりになる。『新釋諸國噺』の目次には、元となった西鶴作品のタイトルが併記されている。よって、「貧の意地」をはじめとする『新釋諸國噺』所収の諸作品を読む行為の延長線上には、典拠となっている西鶴作品を参照する行為が想定されるといっても過言ではあるまい。「貧の意地」の先行論には、典拠との比較検討から独自性を炙り出そうとしたものも少なくない。一方、「大晦日はあはぬ算用」の研究のなかには、書き換えによる話形の変奏を追跡した論攷もある。[3]「貧の意地」は、「大晦日はあはぬ算用」との差異自体を読むという行為をも読者に投じてきたのだ。

『精選現代文B』は、「どのように印象が異なるか、話し合ってみよう」と問うていた。だが、「印象」に終始するだけでなく、精読から差異を具体化し、「貧の意地」と「大晦日はあはぬ算用」との間の往還を試みることも説かれるべきであろう。そこで、太宰治「貧の意地」に焦点を当てつつ、反復された人やもの、構図などが新たな文脈へと改変されていく過程を追究

したい。

Ⅱ　「駄目」「弱気」というベクトル

「貧の意地」のストーリーは、「大晦日はあはぬ算用」とほぼ一致している。だが、その方向性には大きな違いが看取されてきた。たとえば、『西鶴諸国咄』では「大晦日はあはぬ算用」に「義理」と付記されており、宗政五十緒の注釈でも、この作品の「あらまし」について「江戸の武士仲間の「義理」譚」[4]と解説されている。タイトルから明らかなように、「貧の意地」は、武士というよりも「貧」者の「意地」である。竹野静雄は、「太宰の真骨頂」は「原話の意味（義理）を転換して、「貧の意地」とした点に求めねばなるまい」[5]という。また、「大晦日はあはぬ算用」で「「義理」の象徴として描かれていた」場面に、太宰の「貧の意地」では「老いの一徹、貧の意地、痩せても枯れても武士のはしくれ」とあることを受け、「〈貧の意地〉＝武士の意地」との構図を導きながらも安易な単純化を避けつつ、「太宰は「大晦日」にプロットを借りることで、表面上は賞賛され得べき武士の意地（義理）を描いているように見せているだけなのではあるまいか」「つまり、窮極状態にあっても人々がそれぞれに持ち続けるであろう自己の譲れない部分（人間としての意地）を描くのだという太宰の意図がある」[6]とした前田秀美の指摘もある。「武士」から「貧」者へ、「義理」から「意地」へといった読みは、書き換えによる両作の差異をわかりやすく図式化していよう。[7]

ただし、「義理」から「意地」へと主題の転換を把捉するにしても、手がかりとなるのは、「十倍」にも増えたという分量を中心とした、書き換えや書き加えである。そして、「貧の意地」における分量の増加は、原田内助等の人物造形および語り手の言説に費やされている。「貧の意地」の先行論のほとんどが、そこに着目してきた。なかでも、主人公である原田内助が、「駄目な男」と規定されていく冒頭部の語りは、必ずといってよいほどに言及されてきた箇所でもある。

むかし江戸品川、藤茶屋のあたり、見るかげも無き草の庵に、原田内助といふおそろしく鬚の濃い、眼の血走つた中年の大男が住んでゐた。容貌おそろしげなる人は、その自身の顔の威厳にみづから恐縮して、かへつて、へんに弱気になつてゐるものであるが、この原田内助も、眉は太く眼はぎよろりとして、ただものでないやうな立派な顔をし

てゐながら、いつかうに駄目な男で、［以下略］

「駄目な男」という言葉は、「大晦日はあはぬ算用」には見られない。主人公・原田に関して「大晦日はあはぬ算用」の冒頭では、「すぐなる今の世を、横にわたる男」という人物像と、「朝の薪にことをかき、夕の油火をも見ず」という貧しさとが語られはするものの、情報量としては「貧の意地」に比べてかなり少ない。原田の「駄目な男」といった面を徹底して描き出していくのが、「貧の意地」の特徴ともいえる。だが、「へんに弱気」であるかはともかく、「大晦日はあはぬ算用」に表されている原田内助が、「駄目」であることは読み取りやすいだろう。冒頭部には、「煤をも払はず、二十八日まで髭もそらず、朱鞘の反をかへして」、掛取りに来た「米屋の若い者」を追い返し、「広き江戸にさへ住みかね、この四五年、品川の藤茶屋のあたりに棚かりて」とある。貧しさの元となっている原田の生活は、「大晦日はあはぬ算用」と「貧の意地」とで基本的には一貫している。原田の「駄目」さ加減は、「大晦日はあはぬ算用」を読む限りでも容易に想像できる。「貧の意地」では、それを証明する具体例が新たに加えられ、冒頭部で執拗に繰り返される。そのうえ、「駄目な男」という言葉が、たびたび原田の人物評として語り手により挙げられる。よって、「駄目な男」という設定は、「大晦日はあはぬ算用」の原田像を拡張するような言説だと考えられよう。

「貧の意地」では、冒頭部における「へんに弱気」から「原田内助も」を挟み、「いつかうに駄目な男」へといたる文脈や、「弱気で酒くらひの、駄目な男の原田内助」といった言説など、「駄目」と重なり合い、「弱気」という原田の性格も形作られていく。「大晦日はあはぬ算用」の原田像を始点としながら、そこに「弱気」という性格が加算されたとも換言できよう。「貧の意地」における原田内助の「駄目」「弱気」という設定は、「弱者であるがゆえに、世間の片隅で精一杯意地を張り、哀れにも滑稽に生きていく。その姿に太宰は温かい眼差しを注いでいるのである。それは、彼の人生体験に深く根ざしていた」[8]などと、作家・太宰治による登場人物への同調と目されるきらいがあった。しかし、藤原耕作は、特に、「内助の「気の弱い男」・「弱気な男」としての設定」「内助の〈弱さ〉に可能性を見出そうとする姿勢」に注目し、「〈強〉／〈弱〉、〈特〉／〈損〉、〈富〉／〈貧〉などの対立においてあえて後者に可能性を見出そうとする姿勢を取ることで、明治以後の日本を支配した〈富国強兵〉イデオロギーとでもいうべきものを相対化し得ている」[9]と述べ

ている。「凡例」に「昭和聖代の日本の作家に与へられた義務と信じ、むきになつて書いた、とは言へる」とある『新釋諸國噺』であればこそ、戦時下にまでいたるイデオロギーとの関連性は見逃しがたい。

藤原の指摘は示唆に富むが、「駄目」「弱気」といった原田内助の性質が語り手による規定であることに鑑みれば、作家自身への還元や時代状況との連関だけでなく、語りの方向性についても精査する余地はあろう。少なくとも「貧の意地」において原田を語る言葉は、「大晦日はあはぬ算用」に比して「駄目」「弱気」といった方向に過剰である。この過剰な言葉の供給は、物語をいかなるベクトルに牽引しているのだろうか。

Ⅲ　下降する上書き

これまでの先行研究では、「駄目」「弱気」に代表される原田内助の造形と、それによって形成される物語のベクトルとは、「滑稽化」あるいは「戯画化」といった言葉で解釈されてきた観がある。[10] 安易な「滑稽化」「戯画化」といった捉え方に警鐘を鳴らした木村小夜は、問題をその内実に見て精緻な語りの分析を行っている。[11] ともあれ、滑稽や戯画は、おどけ・おもしろさ・おかしさの強調である。「貧の意地」が「滑稽化」「戯画化」と評価されてきた背景には、物語内容や原田らを語る言葉に、おもしろさやおかしさが感じ取られてきたからにほかなるまい。「貧の意地」であれば、原田内助などの登場人物の描かれ方や、物語の展開、あるいは「大晦日はあはぬ算用」との差異からも「滑稽化」「戯画化」の深度を測れるだろう。そこで、個人的なものであり、一般化しがたいおもしろさやおかしさを、語りが物語をいかなるベクトルに牽引しているかという構造的なアプローチからあらためて考察したい。

「貧の意地」冒頭に表された原田の行動について、「読者に嫌悪感を抱かせるようなものではない」とする前田秀美は、「読者にとっての原田像は「駄目な男」ではなく、むしろ人を疑わない、気の良い、人情味のある「愛すべき男」として肯定的に印象付けられている」[12] と述べている。しかし、だからといって「駄目な男」ではないわけではない。「人を疑わない、気の良い、人情味のある」といった印象は、冒頭で語られた「蜆売りのずるい少年から、嘘の身上噺を聞いて、おいおい声を放つて泣き、蜆を全部買ひしめて」や「人のおだてに乗つて、狐にでも憑かれたみたいにおろおろして質屋へ走つて行つて金を作つてごちそうし」といった、原田の人のよさを予感させる失敗か

ら読み取られたものであろう。が、肯定的な印象と捉えられる原田の性質は、同時に貧困状況を招くような彼の欠点でもある。元より、典拠である「大晦日はあはぬ算用」の原田が、「駄目」な人物像であった。「貧の意地」では、典拠に描かれた「駄目」な原田像が拡張して語られている。いわば、過剰に欠点を供給する「貧の意地」の語りは、「大晦日はあはぬ算用」に比べて、マイナス方向に強い牽引力を発揮しているといえよう。

このような下降化する語りは、冒頭部よりむしろ原田の女房が半井清庵に一〇両の小判を借り受けてきた後の場面に顕著である。小判を見た原田が、「この金は使はれぬぞ」といったのに対し、「亭主もいよいよ本当に気が狂つたかと、ぎよつとした」という女房の推測が挿入されている。続けて語り手は、女房の推測をわざわざ否定し、「狂つたのではない。駄目な男といふものは幸福を受取るに当つてさへ、下手くそを極めるものである」と、「駄目な男」の行動原理として原田の発言を解説する。ここには、原田＝「駄目な男」を印象付ける文脈が読み取れるだろうが、その直後は次のように語られていく。

「このまま使つては、果報負けがして、わしは死ぬかも知れない。」と、内助は、もつともらしい顔で言ひ、「お前は、わしを殺すつもりか?」と、血走つた眼で女房を睨み、それから、にやりと笑つて、「まさか、そのやうな夜叉でもあるまい、飲もう。飲まなければ死ぬであらう。おお、雪が降つて来た。久し振りで風流の友と語りたい。お前はこれから一走りして、近所の友人たちを呼んでくるがいい。山崎、熊井、宇津木、大竹、磯、月村、この六人を呼んで来い。いや、短慶坊主も加えて、七人。大急ぎで呼んで来い。帰りは酒屋に寄つて、さかなは、まあ、有合わせでよからう。」なんの事は無い。うれしさで、わくわくして酒を飲みたくなつただけの事なのであつた。

「この金は使はれぬぞ」という原田の発言は、「幸福を受取るに当たつてさへ、下手くそを極めるもの」であるがゆえではない。語り手は、自らの言葉を覆している。原田は、「うれしさで、わくわくして酒を飲みたくなつただけ」なのである。

原田の心理には、語り手にも触知できない部分があるようだ。語り手による解説がはずれたと見る向きもあろう。だが、ここで明白となるのは、そのような語り手の機能や能力よりも、「なんの事は無い」と語られているように、原田の言動が、「駄目な男」を示すアフォリズムに比べ、はるかにたいした理

由をもっていなかったということであろう。「幸福を受取るに当たつてさへ、下手くそを極める」といった説明を要するまでもなく、単純明快な「駄目」さが際立つように、語りが構成されているのである。語り手の言説は、予想よりも酷い結果を示しているといえる。ただし、酷いとはいえ、それは深刻なものではなく、「うれしさ」や「わくわく」という言葉に引き継がれた、明るさとくだらなさとを兼ね備える、読者を脱力させるような展開になっていよう。このような「駄目」な性質の強調という点は、原田だけでなく、「貧の意地」の他の登場人物にも通底している。

原田の家に集まった友人は、「いづれも、このあたりの長屋に住んでその日暮しの貧病に悩む浪人」である。彼らの格好は、「浴衣に陣羽織といふ姿の者」「女房の小袖を裏返しに着て袖の形をごまかさうと腕まくりの姿の者」「半襦袢に馬乗袴、それに縫紋の夏羽織といふ姿」など、「ひとりとしてまともな服装の者は無かつたが、流石に武士の附き合ひは格別」と語られている。貧しい生活を送る浪人らではあるが、「互ひの服装に就いて笑ったりなんかする者は無く、いかめしく挨拶を交し、座が定つてから、浴衣に陣羽織の山崎老がやをら進み出て主人の原田に、今宵の客を代表して鷹揚に謝辞を述べ」る。語り手をして「流石に武士の附き合ひは格別」といわしめるゆえんであろう彼らのふるまいは、しかし、厳めしい挨拶にしても鷹揚な謝辞にしても、「ひとりとしてまともな服装の者は無かつた」状況下と合わせ見れば、厳粛さも滑稽に見えてこよう。まともな格好をしたものがいないなかで、真剣にふるまえばふるまうほどに立ち上がってくるおかしさがある。

「大晦日はあはぬ算用」で原田の家に集まる客の姿は、「いづれも紙子の袖をつらね、時ならぬ一重羽織、どこやらむかしを忘れず」とされている。原田と変わらぬ貧しさは、「紙子の袖」「時ならぬ一重羽織」に表れているが、同時に、仕官していた頃の昔を思わせる佇まいでもあるようだ。「大晦日はあはぬ算用」には、彼らの身なりに対し、「ひとりとしてまともな服装の者は無かつた」などという語り手の注釈は入っていない。「大晦日はあはぬ算用」のように状況だけでも、集まった客がまともな格好でないのはわかる。にもかかわらず、「貧の意地」では、一人ひとりの格好がさらに細かく示され、語り手がそれを「ひとりとしてまともな服装の者は無かつた」とまとめている。したがって、「貧の意地」の語りは、貧しさによって生じる異様な状態の誇張を目論んでいるといえよう。

語り手による誇張表現のほとんどは、登場人物らの貧しさや

欠点など、「駄目」な性質に関わる部分であった。これを引き金とした、言動と状況との落差に、語り手は適宜注釈を加えていく。「大晦日はあはぬ算用」との対比は、この下方への書き換えをより鮮明にする。多くの先行論でも言及されてきた、「貧の意地」における「戯画化」や「滑稽化」、つまり、おもしろさやおかしさといった〈笑い〉への志向は、下降化を誇張する語りの構造によって形成されているのである。

Ⅳ　滑稽化と〈笑い〉

〈笑い〉に対する志向性は、「貧の意地」だけではなく、「大晦日はあはぬ算用」にも顕著である。物語の後半、原田の催した酒宴が終わりに差し掛かった場面における喜劇的な展開は、両作に大差はない。

酒宴の終盤、原田らは一両足りなくなっていることに気付く。客は皆、身の潔白を証明しようとし、なかには着物を脱いで打ち振るう者もいる。そこに、あいにく一両をもっていた一人の客（「貧の意地」では短慶）が「金子一両持ち合はすこそ、因果なれ。思ひもよらぬ事に、一命を捨つる」といって切腹しようとする。それが原田の一両ではないものの、無実であると即座に証明できない事態が、命を懸けるという行為に結びつく。切腹が武士ならではの行動であればこそ、潔白の証明ができない以上、命を懸ける行為が、彼らの間における規範性（＝「義理」）として立ち上がる。とはいえ、貧しい浪人の酒宴であり、直前には、着物を脱いで打ち振るうような行動が語られているために、あまりに規範的なふるまいがかえって場にそぐわなくなる。原田たちも切腹を押し止めようとする。だが、切腹の意志は変わらぬまま、行燈の下より一両が見つけ出された結果、深刻な行為は上滑りしてしまう。しかも、「内証より、内儀声を立てて、「小判はこの方へまゐつた」と、重箱の蓋につけて」と、原田の女房がもう一両もってきてしまうのだから、物語の喜劇性はあらためて説明するまでもないだろう。

「大晦日はあはぬ算用」における〈笑い〉について、堀切実は、麻生磯次『滑稽文学論』（昭和29・4、東京大学出版会）で挙げられている、「卑俗化の理論」「不調和の理論」「社会的不適切性の理論」という三つの理論によりつつ次のように述べている。

> 武士の「義理」をめぐる浪人たちの過剰ともみられる反省心が、おのずと一種の滑稽感をもたらしているのも、こ

の不調和の笑いの範疇に入るべきものであり、義理をめぐる驚くべきリゴリズムと、それによって生ずる喜劇性とが交錯するところに、西鶴説話の独特な性格が生まれているのだといえよう。［中略］これは第一の柱である卑俗化の理論とも重なる点であるが、大名・武士・僧侶・学者といったような、社会的威信や体面をとりつくろわねばならぬ地位の者が、その権威を失墜することによる滑稽感なども、やはり、この種の知的な思考活動に基づく場合が多いのである。[13]

堀切のいう「不調和の理論」とは、「ある事実に対する知的な興味の高まりが、実際には期待外れで、全く無意味であったりする場合、そこでは、その完全に興味を失った知的な経過が、滑稽の感じをもたらす」というものであり、一方、「卑俗化の理論」とは、「対象を卑俗なもの、価値のないものとして見下す働きによって起こる〈笑い〉」「価値あるものと考えられていた対象物の価値を引きずり下ろして、品位をおとしめることを契機とした〈笑い〉」[14]である。「大晦日はあはぬ算用」の〈笑い〉の構造分析として堀切の指摘はわかりやすい。

「義理」に重きを置く、高度な精神性に支えられた関係にあると目された共同体が、その「義理」とは遠く離れた喜劇的状況に陥る展開に、堀切は、「不調和の理論」を見ているのだろう。そして、一〇両が九両に減ったと思いきや一一両に増えた際に、「この金子、ひたもの数多くなる事、目出たし」と客たちが全員一致で発した、体面を取り繕い、場を収めようとするための目茶苦茶な結論がさらなる〈笑い〉を引き起こす。「不調和」とともに、極めてナンセンスな〈笑い〉が、ここには含まれていよう。また、武士から浪人へ零落した者たちによる騒動という、権威的な価値の失墜（「卑俗化の理論」）が大枠を担い、〈笑い〉の土台になっている点も見逃せない。

物語の結末で、原田は、七人の客を一人ずつ順番に帰らせ、庭の手水鉢の上に置いた一両を、出した当人がもって行くという提案をする。原田の思惑通り、客の内の誰かが一両をもって帰るのだが、「大晦日はあはぬ算用」では、最後に「あるじの即座の分別、座なれたる客のしこなし、かれこれ武士のつきあひ、格別ぞかし」と語り手の注釈が入っている。体面ばかりで、大袈裟な混乱を演じた彼らの姿を読み、「武士のつきあひ、格別ぞかし」と感じる読者は少ないだろう。「あるじ即座の分別」とあるが、すでに「夜更鶏も、鳴く時」になり、かなりの時間が経過している。「卑俗化の理論」という〈笑い〉の要素

は、この語り手の言葉にこそ集約されていよう。「不調和」をきたす言動と相乗させ、武士という権威的な価値は、執拗に貶められているのである。

「大晦日はあはぬ算用」が、「卑俗化の理論」を骨子とした、〈笑い〉の要素を多分に孕んでいるのは明らかであろう。では、「貧の意地」でそれは、いかに書き換えられたのだろうか。「貧の意地」では、原田が一両足りなくなっているのに気付いた後、次に「一座の長老の山崎」がそれを指摘する。原田が先に酒屋に一両払ったというのを、山崎は、「「いやいや、さうではない。」と老いの頑固」「この山崎の眼光に狂ひはない」と否定している。そのうえで、「「この上は、それがし、まつぱだかになつて身の潔白を立て申す。」と山崎は老いの一徹、貧の意地、痩せても枯れても武士のはしくれ」と語られ、「ふんどし一つになつて、投網でも打つやうな形で大袈裟に浴衣をふるひ、「おのおのがた、見とどけたか。」と顔を蒼くして言つた」という場面が続く。雪の降る大晦日に、「一座の長老」が「ふんどし一つ」になっているのである。寒さに蒼くなり、ふるえているだろう情景が浮かぶ。先行論では、典拠からの主題の変更が読み取られた箇所であるが、山崎が「意地」を見せるにあたり、「貧」や「武士」と並んで「老い」が、物語に滑稽な印象をもたらす新たな要素となっているのである。

二人目の大竹は、着物を脱ぐと、「ふんどしをしてゐない事を暴露し、けれどもにこりともせず、袴をさかさにしてふるつて」いる。「部屋の雰囲気が次第に殺気立つて物凄くなつて来た」とあるが、しかし、語り手によって読者に対し「ふんどしをしてゐない事」を暴露された人物がいるのだから、状況とは裏腹にふんどしももち合わせていない武士が全裸で着物をふるう、あまりにも滑稽な姿が想像されてこよう。そして、三人目となる、偶然一両をもっていた人物にいたっては、「どてらを尻端折して毛脛丸出しの短慶坊が、立ち上がりかけて急に劇烈の腹痛に襲はれたかのやうに険しく顔をしかめて」と、彼の表情が、苦悩を抱く内面とはあまりにかけ離れた即物的な表現で喩えられる。一両が紛失し、室内は緊迫した状態にあるようだが、同時に語り手の言説は、その雰囲気を壊すかのようなものとなっていよう。語り手は、張り詰めた雰囲気のなかで、規範性に基づく行動をしようとする彼らを下方に引き落とし、状況との落差を大きく作り出しているのである。

この落差は、緊迫した場面とは不釣り合いな状況を表す。これを、先に触れた理論に照らし合わせれば、「不調和」による〈笑い〉といえるだろうし、落差を生成している、下降化のベ

クトルは「卑俗化」に当て嵌まりもしよう。一両紛失の場面における書き換えや書き加えは、元々あった〈笑い〉の要素を構造的に増幅しているように読める。しかもそれは、前半部と同じく、一人ひとりの人物を子細に描く、他との差別化を図った個性の確立によって成立している。

行燈の下に小判が一枚見つかった場面でも、「うせ物は、とかく、へんてつもないところから出る。それにつけても、平常の心掛けが大切。」これは山崎」とある。「大晦日はあはぬ算用」にはなかった発話であるが、「平常の心掛けが大切」と「ふんどし一つ」で大騒ぎをした山崎にいわせているのだ。原田の女房が一両をもってきて小判が一一両になった際には、「十両の小判が時に依つて十一両にならぬものでもない。よくある事だ。まづは、お収め」と発言した山崎が、「すこし耄碌してゐるらしい」と語り手に注釈される。「一座の長老の山崎」という個性の設定は「耄碌」という落としどころに着地させられた。「耄碌」という言葉は、一一両の小判を押しつけられそうになった原田による「金が子を産んだと、やにさがるほど耄碌してゐません」との発言と呼応し、語り手の注釈的な言葉が物語内の空間全体に周知され、読者の脳裡に山崎の姿を再び浮かび上がらせるだろう。「大晦日はあはぬ算用」では、七人の客という集団がひとつの人格であるかのようにされていた。だが、「貧の意地」では、山崎のような個性によっても、「大晦日はあはぬ算用」から飛躍した滑稽化が果たされているのである。

V　対比する視座

「一座の長老の山崎」という個性の創造は特筆に値する。語り手によるアフォリズムの注釈こそないが、「老い」「耄碌」という山崎の個性は、原田の「駄目」「弱気」にも匹敵する、「貧の意地」における下降化のベクトルを支えている特徴であろう。「駄目」や「弱気」、「老い」や「耄碌」を強調し、彼らを下方に誇張する語りの構造は、物語の方向性を示唆する典拠との大きな差異でもある。そして、それは、「貧」「武士」とも無関係ではない。

余分の一両を返そうとする場面での原田については、「弱気」な性格が、「自分の損になる場合は、人が変つたやうに偉さうな理屈を並べ、いよいよ自分に損が来るやうに努力し、人の言は一切容れず、ただ、ひたすら屁理屈を並べてねばる」「あの自尊心の倒錯」を招いたと語られている。「自尊心の倒錯」は、

「原田内助、貧なりといへども武士のはしくれ、お金も何も欲しくござらぬ。この一両のみならず、こちらの十両も、みなさんお持ち帰り下さい」という原田の論理に色濃く表れていよう。原田の自尊心は、「武士」としての規範性に基づいているようだが、しかし、その直後には、「貧者には貧者の意地があります」とも発言されている。山崎の「老い」も、「貧の意地、痩せても枯れても武士のはしくれ」と並べられていた。したがって、「貧者」／「武士」、「意地」／「義理」の構図は、彼らの個性と絡みながら、並列的に連関させられているといえるだろう。

また、「貧の意地」の結末は、語り手の注釈的な言葉ではなく、「落ちぶれても、武士はさすがに違ふものだと、女房は可憐に緊張して勝手元へ行き、お酒の燗に取りかかる」という原田の女房を焦点化した記述になっている。「落ちぶれても、武士はさすがに違ふものだ」という女房の感懐は、「大晦日はあはぬ算用」の語り手による「かれこれ武士のつきあひ、格別ぞかし」という注釈的な言説と内容的には大差はないのかもしれない。だが、「貧の意地」の語り手は、それを自ら語ることを回避している。「貧の意地」では類似した言説が女房に委ねられた。原田らが繰り広げた喜劇を読み、読者は、女房のように「武士はさすがに違ふ」とは思うまい。この後に及んでまだ酒を飲もうとする原田に従い、燗を付ける女房の感想は的外れとしかいいようがないだろう。「大晦日はあはぬ算用」は、これが語り手の言説であったために、物語の外部となる「武士」への皮肉として機能していた。しかし、「貧の意地」では、このような外部を視野に入れた批評性の生成が避けられ、女房の主観に回収させることで、あくまでも物語内で完結させている。「駄目」な夫のために、兄の元へ奔走した女房は、良識ある存在かと思いきや、結局は宴に荷担し、勘違いにいたる人物であったのだ。「貧の意地」は、最後まで読者に「不調和」な印象を与え、女房をも下方に引き落とす志向を露わにしている。すなわち、「貧の意地」は、書き換えおよび書き加えにより、〈笑い〉の拡張を徹底していく方向性で、「大晦日はあはぬ算用」をパロディ化しているのである。

権威的な価値（「武士」）を貶める「卑俗化」によって屹立する、批評的な〈笑い〉が、「大晦日はあはぬ算用」の根幹にはあった。一方、「貧の意地」は、「貧者」／「武士」、「意地」／「義理」の構図が、並列的かつ相補的に連動し、〈笑い〉を形成する基軸となっている。さらに、そこでその〈笑い〉を増幅しているのが、登場人物らの個性と、典拠に比して下方へ誇張す

る語りとである。下降化するベクトルとは、いわば語りの力を駆使した言表行為にほかならない。つまり、個の確立と語りの力という近代小説としての特徴が、〈笑い〉を生み出す動力となっているのだ。「貧の意地」は、文学における〈笑い〉を、近代小説の立場から突き詰めようとしているともいえよう。近世の文学作品と近代小説との差異は、ここに顕著となる。

筑摩書房の教科書『精選現代文B』にある「視点」の項目では、「太宰治は、天性の語りの名手。奔放な語りのなかで、侍たちの意地の滑稽さが容赦なく描かれていくが、その滑稽さはやがて崇高さに反転する。文学の奇跡である」と解説されている。「貧の意地」の滑稽さが「崇高さに反転」しているとは、道徳的かつ国語教育的な読みであろうか。そのような解釈への到達を前提としなくとも、〈笑い〉に対する注視は、言語表現の豊かさや可能性を考察するきっかけとなる。充分に、高校生の国語教育に寄与する観点ともなろう。「貧の意地」の精読では、〈笑い〉の方法を中心に、「大晦日はあはぬ算用」との差異を看取できる。文学における〈笑い〉を、近世と近代との両面から読み解く経路が、「大晦日はあはぬ算用」と「貧の意地」との間には開かれているのである。

注

(1) 諏訪春男「「貧の意地」論」(「太宰治研究」平成15・6)
(2) 饗庭孝男「鑑賞」(『鑑賞日本現代文学　第21巻　太宰治』角川書店、昭和56・2)
(3) 竹野静雄「『大晦日はあはぬ算用』の翻案三変奏——青果(大正)・太宰(昭和)・辻原登(平成)——」(「近世文芸研究と評論」平成22・6)
(4) 宗政五十緒「巻一　あらまし」(宗政五十緒・松田修・暉峻康隆校注／訳『新編日本古典文学全集67　井原西鶴集②』小学館、平成8・5)
(5) (3)に同じ。
(6) 前田秀美「『貧の意地』論」(「愛媛国文研究」平成7・12)
(7) 山口洋子「太宰治「貧の意地」を読む——《わたしのさいかく》をめぐって——」(「月刊国語教育」平成19・6)では、両作の差異を同様の構図で捉えつつも、太宰が「読者に《進上しよう》として《珍味異化》(「貧の意地の主題」)は、一般的な武士の〈義理〉(建前)ではなく、その背後に見える、人間臭い〈意地〉(本音)であったに違いない」と指摘している。
(8) 渡邊善雄「太宰治「貧の意地」(下)」(「月刊国語教育」平成4・8)
(9) 藤原耕作「太宰治「貧の意地」論——『新釈諸国噺』ノート——」(「国語の研究」平成23・3)
(10) 「滑稽化」「戯画化」を指摘した論文としては、松島芳昭「『貧の意地』——不変なる「義」への執念」(「解釈學」平成2・11)、渡邊善雄「太宰治「貧の意地」(下)」、前田秀美「『貧の意地』論」などが挙げられる。
(11) 木村小夜「『新釈諸國噺』論」(木村小夜『太宰治翻案作品論』和泉書院、平成13・2)
(12) (6)に同じ。
(13) 堀切実「『西鶴諸国咄』における〈笑い〉の種々相——笑いの複合性

と語り口――」（堀切実『読みかえられる西鶴』ぺりかん社、平成13・3）

（14）（13）に同じ。

＊太宰治「貧の意地」の引用は、すべて筑摩書房版『太宰治全集』第七巻（平成10・10）に、井原西鶴「大晦日はあわぬ算用」の引用は、すべて『新編日本古典文学全集67　井原西鶴集②』に拠る。なお、引用に際し旧字は新字にあらためルビは省略した。